

期間番号：22304

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20791776

研究課題名（和文） 精神障害者の社会参加支援のあり方に関する研究

研究課題名（英文） A study about the ideal method of the social participation support of the mental patient

研究代表者

関根 正（SEKINE TADASHI）

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・講師

研究者番号：20404931

研究成果の概要（和文）：精神障害者にとっての入院経験は、長期入院生活を送る上で自己の安定性・肯定性を確保するために必要な【精神科の患者】へと自己アイデンティティを再編成した経験と意味づけされていた。そして、精神障害者にとっての「スティグマ」は自分自身を【精神科の患者】と存在規定したことであり、精神科病院での入院生活が「スティグマ」付与の過程であると示唆された。

また、社会参加過程において感じている「生活のしづらさ」は、自己の喪失感、自己表現の喪失、内なる偏見の存在の3点と考えられた。この3点は精神疾患に由来するというより、精神科病院入院中に形成された自己否定的な自己概念に由来するものと考えられた。

研究成果の概要（英文）：The hospitalization experience for the mental patient is to create meanings to shake things up their identities as “mentally ill people” to ensure stability and affirmation for long stay in the hospital. The “Stigmata” is to rule themselves as “mentally ill people” and it suggests that the process of giving them the “Stigmata” is to staying the psychiatric unit.

In addition, as for "the difficulty in the life" that I felt in a social participation process, it was thought with three points of the existence of lostness of the self, the loss of the self-expression, the inner prejudice. It was thought a thing to be come from a self-concept of this self-abnegation formed during psychiatry Hospital hospitalization more that three points came from a mental disease.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：精神看護学

### 1. 研究開始当初の背景

わが国の精神障害者支援は、病院施設における入院治療中心から、安心して継続的に地域で生活するための地域精神保健福祉を中心とした政策へと移行してきている。

精神障害者は一般に、自尊心が低く生活に対する自信が欠如していることが多いといわれ、その自尊心の低さや地域生活に対する自信のなさが社会復帰を妨げると指摘されている。また、精神障害者は地域生活を送る上で精神症状などの客観的な障害に苦しむだけでなく、主観的な体験としての障害にも悩まされていると指摘されている。

つまり、精神障害者は社会参加をする上で、精神疾患そのものに由来する障害のみならず、精神疾患に罹患したことにまつわる自尊心の低さや自信の欠如といった「主観的な障害」にも苦しんでいると考えられる。このことから精神障害者は二重の障害を抱えているといえる。

以上のことから、精神障害者の社会参加に向けての支援には、社会資源等の環境面・物質面への支援のみならず、精神障害者自身が抱えている「主観的な障害」に対する支援も行っていく必要がある。そのためには、精神障害者はいかなる体験をしているのかという側面を明らかにすることが求められる。

社会参加の理念は当事者の主体性が含まれており、当事者を中心に支援されるべきであることを鑑みれば、当事者一人一人の現実・実態に即した支援が求められる。そのためには、①入院中にどのような体験がなされ、どのような意味づけをしているのか②どのような自己概念が形成され、どのような自己

で社会参加を始めるのか③安定した社会生活までの過程における主観的な苦しみと意味を持った支援の内容、という部分の解明に基づいた精神障害者理解が必須である。

### 2. 研究の目的

精神障害者の社会参加支援のあり方を明らかにする研究構想の下、本研究期間では以下の2点について明らかにしていく。

- 1.精神障害者にとっての入院体験の意味。
- 2.精神障害者が地域生活を送るにあたり感じている「生活のしづらさ」の要因。

### 3. 研究の方法

#### 1) 対象者

精神科病院に入院経験のある地域生活を3年以上送る精神障害者。施設側に対象者候補を選定して頂き、その対象者候補に研究趣旨の説明を書面と口頭にて行い、同意を得た精神障害者とする。

#### 2) データ収集方法

半構成化面接法によるインタビュー調査。

インタビュー調査は、冒頭に調査依頼書を再度書面と口頭にて説明し体調（精神状態）を尋ねる。改めて同意を得た場合にのみ、同意書に署名を頂き調査を行う。

インタビューは「これまでの人生を病気の発症や入院中の体験を含めてお話しください」程度で始め、その後は話の流れに沿うように適宜質問していく。基本的には対象者に自分の思いのままに話してもらい、研究者はナラティブアプローチの対応をとる。インタビュー内容は了解を得て、その場での筆記記録に加えテープ録音をする。

インタビュー終了後は、全体を振り返って

の感想・質問を聞く。また、精神状態の変化にも注意を払う。時間は一人当たり80分から90分を想定。インタビュー技術に関しては、スーパーバイズを受けながら行っていく。

### 3) データ分析方法

質的帰納的手順により行う。分析の妥当性を高める為に、スーパーバイズを受けながら繰り返し検討する。

### 4) 倫理的配慮

施設・対象者に対し書面と口頭にて研究内容、研究方法、インタビューの場所、任意協力、匿名性の保護、データ管理・保管方法、公表の仕方等を説明し同意を得る。さらにインタビュー調査の冒頭に再度書面と口頭にて説明し、署名を頂く。また、インタビューによる過緊張や病歴の想起による心理的侵襲の可能性に対しては、休憩や中止することができることを説明する。なお、所属機関の倫理委員会の承認を得る。

## 4. 研究成果

### 1) 精神障害者にとっての入院経験の意味

長期入院患者の入院生活に関する研究からは、長期入院中は時間が止まったような感覚の状態を送っていることが指摘されている。また病棟のスケジュールや規範を受動的態度で諦め、「仕方がない」と受容することでストレスを回避し、入院生活に適応し安定を得ていることが指摘されている。そのため長期入院患者はQOLが高く、入院生活や入院環境に対する満足度は高いが、退院に直面すると、生活環境や生活スタイルが変わることへの戸惑いや、自分で生活できるかという不安を抱えることとなり、執拗に拒否するケースもあることが指摘されている。

一方、精神障害者にとっての「病い」の意味を理解する研究からは、精神疾患に罹患したという事実からくる「苦しみ」の他に、入院したという事実からも「苦しみ」を感じて

いることが指摘されている。その苦しみの中心は、「社会的な死の宣告」、「自己の存在を無価値にするもの」等と形容される主観的な苦痛である。そのため地域での生活を「スティグマからの自己奪還」と意味づけしていることが明らかにされている。

以上の研究から示唆されることは、長期の入院生活を送る精神障害者は、退院の段階になると自分に付与されていた「スティグマ」を自覚することとなり、その「スティグマ」を抱えたままの状態地域生活を送っていくということである。つまり、長期入院には、退院前後にはじめて自明となる「スティグマ」の付与過程があると考えられることができる。

そこで、地域で生活を送り精神科病院に入院経験を持つ精神障害者を対象として、入院経験の意味づけを明らかにし、精神障害者にとっての「スティグマ」とその「スティグマ」付与の過程、さらには、精神科病院における位置性を検討した。

対象者は7名の精神障害者。年齢は30代後半から70代前半、最長入院期間は2年から22年であった。地域生活期間は6年から17年であった。インタビュー時間・場所は、一人につき、2回のインタビューを実施。時間は1回63分から132分であった。インタビューの場所は対象者の希望に添い、日常的に利用する精神障害者社会復帰施設内の会議室で行った。

精神科病院への入院経験について、『入院したことで10年以上の時間を無駄にしたと思っています。余計におかしな病気になったって思っています。』『家族なんかは病気を良くするために入院するって考えるだろうけど、自分にとっては入院する時には調子が悪いからよくわからないけど、良くなってくると人間関係や色々あって、違う病気になっちゃうって思うんです。』等と語られた。

結果から、精神障害者にとっての入院経験は、医療者や他患者という【他者】からの説明に基づき、入院生活を送る上で自己の安定性・肯定性を確保するために必要な【精神科の患者】という自己否定的で没個性的な自己アイデンティティを再編成した経験として意味づけされていることが示唆された。また、精神障害者にとっての「スティグマ」は、自分自身を【精神科の患者】と存在規定したことであり、精神科病院での入院生活が「スティグマ」付与の過程であると示唆された。

このことから、彼らは、【他者】から自分に発せられる【メッセージ】を通じて自分に要請されている【精神科病院の日常性】に適応するために、【精神科の患者】という自己アイデンティティを再編成すべき対象と自分の存在を自己規定せざるを得ない【立場】を有していると考えられた。つまり、この【立場】が精神科病院における精神障害者の【位置性】であると考えられた。

今後の課題として、より多くの精神障害者に対して個別具体的な経験を明らかにしていく必要性が挙げられた。また、本研究から入院経験が退院後の社会参加過程や自己概念にも影響を及ぼしていることが窺えた。よって、入院経験が社会参加過程や自己概念にどのような影響を与え、意味づけされているか検討する必要性が挙げられた。

## 2) 地域生活を送るにあたり感じている「生活のしづらさ」の要因

精神障害者は地域生活を送る上で、精神症状などの客観的な障害に苦しむだけでなく、主観的な体験としての障害にも悩まされていることが指摘されている。地域での生活を送る精神障害者の体験に着目した研究では、精神障害者にとっての病いの意味やニーズ、生活の質についての研究がなされてきてい

る。これらの研究からは、精神障害者が社会では相手にされないと思っていることや、人に精神障害者と知られてはならないという認識を持っていること等が明らかにされており、個人と社会や人間関係の中で精神障害者であることの社会的意味付けが行われていることが指摘されている。また、同じ障害を持つ仲間との出会いが自分自身に対する認識や人生の転換点になることや、精神障害者自身が自らの体験を「語る」ことを通じて病いの意味を形成すると同時に、自己概念の再構成が行われること等が指摘されている。

筆者らの研究からは、精神障害者は入院生活に適応するために、【精神科の患者】という自己否定的で没個人的な自己アイデンティティに再編成し、その状態のまま退院を迎え、地域生活を送っていくことが示唆されている。

そこで、地域生活を送り精神科病院への入院経験を持つ精神障害者を対象として社会参加過程を明らかにし、精神障害者自身を感じている「生活のしづらさ」と支援の方向性について検討した。

対象者は30代後半から70代前半、地域生活期間は6年から17年であった。インタビュー時間・場所は、一人につき、2回のインタビューを実施。時間は1回63分から132分であった。インタビューの場所は対象者の希望に添い、日常的に利用する精神障害者社会復帰施設内の会議室で行った。

インタビュー内容はライフストーリーとし、質的帰納的分析により段階に区分して代表的な心情とキーワードを抽出、解釈した。解釈から、精神障害者の社会参加過程には以下の4段階があった。

### ①第1段階：退院直後から半年

この段階は、心情として、[何をしたいかわからない]と[無理に何もしない]、キーワー

ドとして、【自由への戸惑い】【自己喪失感の実感】が抽出された。

#### ②第2段階：半年から3年目

この段階は、心情として、[一人では何もできない]と[仲間のすることをまねする]、キーワードとして、【仲間の存在】【社会環境への慣れ】が抽出された。

#### ③第3段階：3年目から10年目

この段階は、心情として、[人の目が気になる]と[自分からやれば人は理解してくれる]、キーワードとして、【人への慣れ】【生活の確立】が抽出された。

#### ④第4段階：10年目以降

この段階は、心情として、[普通の人にはなれない]と[自分は自分でいい]、キーワードとして、【自分自身の実感】【生きがいの発見】が抽出された。

結果から、精神障害者の社会参加過程は、【自由への戸惑い】、【自己喪失感の実感】、【仲間の存在】、【社会環境への慣れ】、【人への慣れ】、【生活の確立】、【自分自身の実感】、【生きがいの発見】という段階があると考えられた。各段階において、複数の心情を抱えた状態で生活を送る中で、安定した地域での生活を送るために自分を肯定的に位置づけ、自己の安定性と肯定性の保障することのできる心情を優先させながら、自己一貫性を獲得していく過程と考えられた。さらに、自己一貫性の獲得には、3つの過程が内包されていると考えられた。

##### (1) 社会化の過程

退院直後、入院中に憧れ、退院を決意させる理由となった「自由」と「自己決定」に戸惑い、孤立感と無力化感を感じながら地域での生活を始めている。同じ病気を持つ仲間と出会い、仲間に誘われて一緒に行動することを通じて、生活に必要な社会的・対人的スキルや生活の仕方を覚えていった。次第に自分

のできる事やわかる事が増えていく中で、精神障害者としての社会化を行っていったと考えられた。

##### (2) 隠蔽からの解放過程

地域住民との接触の中で、自分が精神障害者であることや、精神科病院への入院経験を持つことがスティグマとして扱われる可能性を常に意識していた。そのため地域住民に対して猜疑心を抱き、不安や恐怖心を持ちながら「普通の人」を演じて生活していた。

しかし、自分の体験を語りそれを評価してもらう等の関わりを持つことにより、他者に「ありのままに受け入れられる」経験した。この経験により、自分自身を隠蔽することから解放され、自らによる否定的な意味づけが緩和されていったと考えられた。

##### (3) 統合化の過程

自分の仕事を持つことや自分の役割を持つこと、また、社会の一員として自分の役割を見出すことにより、社会の中での自分の位置（場所）を確立していった。このことにより、精神障害者としての自分を受け入れることができ、自分の存在や生きがいを自覚するようになっていった。これにより、自分という存在に対する肯定的な意味づけができるようになり、自己一貫性を獲得していったと考えられた。

以上より、精神障害者が社会参加過程において感じている「生活のしづらさ」は、自己の喪失感、自己表現の喪失、内なる偏見の存在の3点と考えられた。この3点は精神疾患に由来するというより、精神科病院に入院中に形成された自己否定的な自己概念に由来するものと考えられた。つまり、精神障害者の感じている「生活のしづらさ」は、自分が自分を苦しめているという図式であることが示唆された。

一方、対象者の過程において、ピアサーポ

ートによる有力化、感情・活動の誘発、自分自身を表現・説明する、他者による承認の4点が肯定的な意味づけを付与したと考えられる。よって、支援のあり方は、具体的な体験を通じて「地域社会」に慣れること、日常生活を通じて「人」に慣れること、自己表現・他者評価により自己肯定的な感情をもつこと、3点が示唆された。

今後の課題として、精神障害者の社会参加過程は個別性の高いものといえることから、より多くの個別具体的な事例を検討していくことが挙げられた。また、受け入れる側である地域社会のあり方についても検討していくことが挙げられた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①関根正、精神障害者にとっての長期入院経験の意味 - 精神科病院におけるスティグマ付与の過程 - 、群馬県立県民健康科学大学紀要、査読有、第5巻、2010、pp. 29~41
- ②関根正、精神障害者にとっての入院経験の意味、響きあう街、査読無、No53、2010、pp. 36~46
- ③関根正、小林悟子、精神障害者の社会参加過程に関する研究 - 地域生活を支えた要因 - 、第39回日本看護学会論文集地域看護、査読有、2009、pp. 39~41

[学会発表] (計6件)

- ①関根正、小林悟子、精神障害者の社会参加過程に関する研究 - 出身地域以外で生活を送る当事者への支援のあり方 - 、日本精神保健看護学会第20回学術集会、2010
- ②関根正、小林悟子、精神障害者の社会参加過程に関する研究 - 長期入院後のM氏の過程 - 、日本精神保健看護学会第19回学術集会、2009
- ③関根正、小林悟子、精神障害者にとっての

社会参加過程、第34回日本保健医療社会学会大会、2009

- ④関根正、小林悟子、精神障害者の社会参加過程に関する研究 - 地域生活を支えた要因、第39回日本看護学会 地域看護、2008
- ⑤関根正、小林悟子、当事者にとっての精神科病院への入院経験の意味、日本精神保健看護学会第18回学術集会、2008
- ⑥関根正、精神科病院での入院体験が地域生活に及ぼす影響、第33回日本保健医療社会学会大会、2008

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

関根 正 (TADASHI SEKINE )  
群馬県立県民健康科学大学・看護学部  
講師  
研究者番号：20404931